

学校訪問記「特色ある教育を行う学校」

充実の教育プログラム

3年間で60テーマの科学実験、
毎日がグローバル！ 帰国生とともに

学校法人 五島育英会
東京都大学付属中学校・高等学校

東京都大学付属中学校・高等学校

東京都大学付属中学校・高等学校は、通称トシコーと呼ばれ、世田谷区に校舎を構える完全中高一貫の男子校です。

昭和26年に武蔵工業学園高等学校として開設され、28年に武蔵工業大学付属高等学校に改称、31年には武蔵工業大学付属中学校が併設されました。平成21年に武蔵工業大学が東京都大学に改称したことに伴い、現在の校名である東京都大学付属中学校・高等学校となりました。22年より高等学校での生徒募集を停止し、完全中高一貫校となっています。

本校には主体的な学びを促す仕掛け、特色ある教育プログラムがたくさん用意されています。

例えば、生徒自身が時間管理をするためのツールであるTMシート（タイムマネジメントシート）の存在が挙げられます。早い時期から計画的な学習の習慣や時間管理能力を身に付けることができるよう、特に中学1、2年では、記帳のための時間を設けたり、週に一度、担任がコメントを付したりと、

丁寧な指導を行っています。

また、「科学実験」「中期修了論文」「キャリア・スタディ」等のカリキュラムを多くそろえており、レポートの作成やプレゼンテーションを行う機会が多く設けられています。

近年はグローバル教育に注力しており、積極的な帰国生の受け入れや、海外留学、研修制度を充実させています。

【科学実験】

中学では生物・化学・物理の授業とは別に「科学実験」を時間割に組み込み、3年間で約60テーマ、高校で理系を選択するときに約20のテーマをプラスして実験に取り組みます。実験はクラスを2分割した少人数制で行い、実験終了後には必ず実験レポートを作成、提出したレポートは教員から個別添削指導を受けることができます。

感動する心や観察力を養い、データから論理的に考える力を育て、それを実験終了後のレポートとして書くことで記述力を身につけることができます。記述が苦手な生徒も、繰り返し個別添削指導を受けるうちに、素晴らしいレポートが書けるようになります。



科学実験の様子

【キャリア・スタディ】

キャリア・スタディは、中学3年に1年間をかけて実施するキャリア教育プログラムです。将来の職業や進路を決定することが目的ではなく、「今までの」と「今」の自分を見つめ、将来の進学に向けてもらいたいとの思いで、生徒一人ひとりが大学のその先にある自分の将来像をじっくり考えることを重視しています。まず、これまでの出来事や経験を振り返り、自分自身を見つめなおします。そして、マナー講座や企業研究を経たのち、夏休みを利用して、実際に企業に訪問する企業研修を実施します。研修で体験した内容を個人レポートにまとめ、学園祭（柏苑祭）で発表します。最後に、予選を通過した代表者が研修でお世話になった方々や保護者・下級生の前で1年間

のキャリア・スタディで学んだ内容をプレゼンテーションします。

このプログラムの大きな特色の一つは、卒業生の存在です。同窓会内部にキャリア・スタディ小委員会が設置されており、本プログラムを全面的に支援する体制が敷かれています。マナー講座の講師や研修訪問先となる企業の紹介、研修後のフォローアップに至るまで、様々な部分で卒業生が惜しみない支援をおこなっています。29年度は39社の企業と、のべ93名の卒業生が協力してくださりました。

【中期修了論文】

高校1年ではそれまでの学びの集大成として4000字以上の論文を執筆します。各自で興味のあるテーマを自由に設定し、フィールドワークや調査を行い、仮説を立てて検証します。書き上げた論文は、発表と質疑応答を通じて相互評価を行います。論文の執筆にあたっては、教員1人につき8人程度の生徒を受け持ち、指導を行います。

中学での「科学実験」で化学に興味を持ち、夏休みに実験を繰り返して論文を執筆した生徒もいれば、「II類I類制度（注・本校の教育コース制度）を作った学校側の判断は正しかったのか？」といった独創的なテーマで論文を執筆する生徒もおり、生徒の興味は文系・理系問わず多岐にわたります。この多様性は主体的な学びができていく証であり、また、それを理解し後押

しすることが出来る教員がいることの証でもあります。

本格的な大学受験が始まる前のこの時期に「キャリア・スタディ」の実施や「中期修了論文」を執筆する意味は大きく、大学受験の先にある将来を深く考える良い機会となります。

グローバル教育

グローバル教育は、都市大グループ全体で推進しています。本校では、26年度から帰国生入試を、27年度からは英語でも受験可能なグローバル入試を導入しました。アメリカやヨーロッパだけでなく、アジアなどの非英語圏の国からも幅広く帰国生を受け入れています。帰国生の志願者は6年間連続で増加し、31年度は276名の応募がありました。また、30年の在籍者数に占める帰国生の割合は17.5%という高い割合になっています。

帰国生の持つ良いものは国内生に伝わり、国内生の持つ良いものは帰国生に伝わるとの考えから、帰国生のみならずは作らず、各クラスにバランスよく振り分けます。英語力の高い帰国生はネイティブ・スピーカーによるハイレベルな「取り出し授業」授業を受けることができます。また、帰国生には、それぞれの学力に合わせて随時個別指導を行っています。

クラスに帰国生が加わることで、国内生の英語への興味関心が強くなりました。定期試験前には、帰国生の周り

に国内生が集まり英語を教えてもらう光景や、反対に、国内生が国語や社会を帰国生に教える光景が見られます。

高校1年で行くアメリカ西海岸研修旅行(原則全員参加、6泊8日)では、シリコンバレーを訪れ、世界有数のグローバル企業の本社やアメリカに進出している日本企業への訪問、UCLAやカリフォルニア工科大学へのキャンパスツアーを行い、視野を広げます。

また、任意プログラムでは、「マレーシア異文化体験プログラム」(10日間のホームステイ)や「ニュージールランド語学研修」(3週間)、「ニュージールランド3か月タム留学」等が用意されています。参加した先輩の変化に憧れて積極的に参加を選択する生徒もおり、教育の好循環が生まれています。



【校長の語り】

平成30年度に着任された長野雅弘校長に話を聴きました。

教育の目的は「自立と自律」というふたつのジリツであると確信してい

ます。「自立」とは大人に依存しないで行動できるようにすること。また、「自律」とは他者の判断や指示に依らず、自分自身で判断し行動できること。大学で花開くため、「自立」と「自律」を身に着けることは、高校卒業までに課された必須の要件であるとの信念を持ち、教育に当たっています。

赴任してからは教職員を知るためにコミュニケーションを取り、話を聴くことを意識して行いました。教職員には、「この学校をどうしていきたいですか」「生徒たちをどう育ていきたいですか」という質問を投げかけました。後日、全教職員一人一人と面談し、その答えを聴いていきました。面談を通して、教育方針を確認し合い、信頼関係を築いていきました。

また、教職員も人間として学び続けることが大切であると伝えました。教職員は研修や勉強会へさらに積極的に参加するようになりました。教員が学び続け、その楽しさを自ら示せるようになると、それは生徒たちに伝わり、生徒たちも自ら学び始めるようになります。

「自立と自律」を身に着けるためには「選択」が重要なテーマとなります。学校は、授業や行事等で、選択する機会をたくさん用意してあげる場所です。教員が行うべきは指示ではありません。相談やアドバイスをにとどめ、あくまでも生徒自身に決めさせるのです。失敗することもあるでしょうが、成功と失敗を繰り返していくことで

健全な精神が培われ、生徒たちは成長していくのです。本校には、私が赴任する以前から魅力的な教育プログラムがたくさんありましたが、選択肢として整え、生徒自身に選ばせるようにしたところ、生徒たちが一気に成長している、と実感しています。

【取材を終えて】

2020年度入試より導入される大学入学共通テストに代表される入試改革の場面では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」に「主体性・多様性・協働性」という学力の三要素が試されます。本校の教育プログラムは、これらの学力を自然と身に着けられる取り組みになっていると感じました。

また、経営面では、ステークホルダーの満足度に濃やかな配慮がなされている点に着目しました。実践的な体験に基づく教育プログラムには生徒自身の満足度が、そのプログラムを支える一翼を担っていることに卒業生たちの満足度が高められていました。本稿では触れられませんが、学年だよりを毎週発行するなど、情報共有に努める学校の姿勢に、保護者の満足度への配慮が感じられました。そして、充実の教育プログラムを支える教職員に対しても、教育改善を支援し、十分本領が発揮できるよう傾聴と対話を重視していることが学校全体の教育力の向上につながっていると感じました。

(取材) 私学経営情報センター